Episode1

鈴木（すずき） 朋美（ともみ）さん

現在、高校１年生。食物文化科の高校に通い、将来の夢に向け学業に励む。広報「もとみや」平成19年２月号の表紙に、保育所の友達と一緒にだんごさしをしている姿が掲載された。

人の健康を支える栄養士が夢です

人を健康にそして笑顔に将来の夢に向かって

広報「もとみや」平成19年2月号で表紙を飾っているのは、だんごさしに挑戦している第二保育所の子どもたち。一番右にいるのが当時6歳だった鈴木さん。

「この表紙を覚えています。とても久しぶりに見ました。私、変わってないですね」。一緒に表紙に写っている友達や担任の先生など、当時の様子を振り返る鈴木さん。友達もたくさんできた。「この頃は、いつも泣いてばかりの泣き虫でした。絵を描いたり、おままごとをしたりして遊ぶことが好きでした」。

小学生になってからは、料理やお菓子を作ることに夢中に。「家族や友達のために何かを作り、食べてもらえるとてもうれしい気持ちになりました」。小学校や中学校への通学途中には、冬にだけ見える安達太良山の白いハートがお気に入りだった。

10年前、保育所に通っていた彼女は現在、高校一年生。調理師免許の資格を得るため、食物文化科で学んでいる。一年生は和食を学び、調理実習が毎週ある。そのため家では、課題に向けよく練習をしている。厚焼き玉子を作るテストの前には、卵を一日に30個使って練習したことも。「家族みんなに食べてもらって、いつも協力してもらっています。家族には本当に感謝しています」。ポテトサラダが得意でよく作る。家族の「〝おいしかったよ〟の一言で、また作りたいな」と思う。

そんな鈴木さんの将来の夢は、『栄養士になること』。きっかけは、ご家族が病気をしたときだった。「病院では管理栄養士の先生が、糖分の少ないものやヘルシーなメニューなどを考えて、食事を出してくれていたことを覚えています」。それから食事と健康の関わりや大切さを知り、栄養士という仕事に興味を持った。進学などを考え始めたときに、そのことを思い出しいろいろ調べ、今通っている高校に通うことを決めた。

幼い頃の思い出から将来の夢、少し緊張しながらも一つ一つ丁寧に話をしてくれた鈴木さん。「人の健康を考え、その人にあった栄養や食事をサポートしたいです。食事を通してたくさんの人が笑顔になり、さらに健康になってほしい。誰かのために役に立ちたい」と話すその姿は10年前から大きく成長していた。

受け継いできた人たちが皆文化財

明治の初めから、浮島神社の氏子たちによって脈々と受け継がれてきた浮島神社太々神楽。その神楽の現在の楽長が三瓶壽泰さんだ。

三瓶さんは、楽人（がくじん）をしていた父の影響で、物心つく頃から御神楽の音を覚えて、口笛を吹いたり、太鼓をたたく真似をしたりしていた。初めて舞台に立ったのは18歳のころ。楽人募集で集まった同年代数人で、指導を受けながら練習を積んだ。一つの舞を覚えると次に、それを覚えるとまた次と、覚える内容はたくさんあった。先輩の熱心な指導のおかげで舞・お囃子は一通り覚えることができた。

初舞台から36年。御神楽には定年がないため自分が続けられる限りは続けることができる。昨年の12月に開催された民俗芸能大会では、80代の大先輩が見事な国堅楽を披露。「楽人としてこうでなければと思いました。ナンバーワンの舞を見ました」とその時を振り返る。

浮島神社太々神楽は昭和52年に県の無形民俗芸能文化財に指定された。ある時楽人の一人が、「俺たちがいなければ、舞もお囃子も披露できないのだから有形じゃないか」と言い、みんなで笑ったことがあった。「半分は冗談ですが、私たちは先人が習得してきたことを脈々と受け継いできました。そうした意味で御神楽をする一人一人が宝なのではないかと考えます」。「そしてこの先輩たちから学んだことを次の世代へとしっかり継承していくことが大切なんだと思います」。

どうすれば後継者を拡充できるか。時には悩むこともある。そうした中でも三瓶さんは「焦りはありません。この歴史を淡々と力強く引き継ぎ、先輩としての姿を見せ、雰囲気づくりをしていきたい」そう思い、この太々神楽を演じている。

先人に学んだ技を次の世代へ継承していく

Episode2

三瓶（さんぺい） 壽泰（ひさやす）さん

白岩の浮島神社太々神楽・楽長。物心つく頃から御神楽が身近にあり、18歳で初めての舞台に立つ。初舞台から36年間太々神楽の一員として、春・秋の祭りなどで御神楽を披露してきた。